

2024年10月13日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教13「神の愛」

創世記3：8～10、ヨハネ3：16～21

ヨハネ福音書は、神さまの愛が散りばめられているような福音書です。イエスさまの最初のしるしはカナの婚礼でした。イエスさまは水をぶどう酒に変えられます。それはまるで水のような味気のないわたしたちの愛を、香り豊かな最高のぶどう酒、愛の喜びで満たしてくださるということです。そのぶどう酒は十字架で流された血を表します。宮きよめでは、イエスさまは愛を取り戻す戦いをしておられます。神殿の商売人を追い出されたのは、まるで商売の相手のように、損得勘定でしか神さまを見られない、人を見られない。そういうわたしたちの間違った愛をひっくり返されます。イエスさまが弟子たちの足を洗われた時も、「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13：1）とあります。その先には十字架で命を捨てられる自己犠牲の愛があります。最後は、三度イエスさまを否定したペトロに「あなたはわたしを愛するか」と三度お尋ねになられます。そして「わたしの羊を飼いなさい」と教会を託されます。失敗だらけのわたしたちをどこまでも信じて託してくださるのです。そこに神さまの愛があります。

けれども、わたしたちはその愛が分かりません。だから自分が神さまから愛されていることに気づかないし、その愛を受け入れず、これを拒否してしまいます。それがイエスさまを十字架につけてしまうという人間の罪の姿に表されています。「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」（19節）人間は、神さまとの約束を破り、木の実を食べてしまいます。すると人間は神さまを避けるようになりました。「園の木の間に隠れる」（創世記3：8）のです。これが「光よりも闇を好む」人間の姿に他なりません。そして神さまは人間に向かって言われます。「どこにいるのか」（創世記3：9）そのようにして人間は完全に御前から失われた存在になってしまいました。

それに関連して「独り子を信じる者が一人も滅びないで」（16節）ここに「滅びる」と訳されている言葉は、「失われる」という意味があります。例えば、ルカ福音書の15章にある見失った一匹の羊の話や父親の財産を散財した放蕩息子が帰ってきた時に「いなくなっていたのに見つかった」（15：24）と言って父親が喜ぶ、そのいなくなった状態。またザアカイの物語の最後に「人の子は、失われたものを捜して救うために来た」（19：10）その失われた状態を指しています。愛する者の手から離れ、失われてしまうこと。そこに人間の滅びが示されています。しかも、それがもうすでに裁きになっていると福音書は語るのです。

そのように神さまの前から失われた者は、お互いの関係をも見失います。創世記では、樂園追放の後には、カインとアベルの話になります。「お前の弟アベルはどこにいるのか」「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」（創世記4：9）そのように相手の存在を消す。それはまさに今の世界の状態と言ってもよいでしょう。人は互いに相手を排除し、憎しみあい、殺しあっています。それが裁きでなくて何でしょうか。罪ゆえに人間は孤独になり、ますます失われていくのです。ロシアにせよ、イスラエルにせよ、孤独が暴走しています。

それはわたしたちの身近な問題でもあります。コロナ禍は、そういうわたしたちの孤独を浮き彫りにしました。それまではなるべく孤独にならないように努めて行き来していました。でも

それが制限され、行き来できなくなると、人はむしろ孤独の中に閉じこもるようになりました。まるで孤独になることを欲していたかのように、孤独を楽しむかのように、自ら孤独になっていくのです。そしていつの間にか、誰かの善意を、人の愛を受け入れなくなってしまう。余計なお世話だと払いのけるようになってしまう。自分は誰の助けも借りずに一人で生きていけると考える。そういう頑なさがあります。加藤常明先生は説教の中で「防水加工された人間」と表現していました。神さまの愛も、人の愛も弾いてしまう。当然、自分からも人を愛せなくなる。それが罪ゆえに失われた存在なのです。

でも、その失われたものを捜して孤独にさせない、あなたは一人ではない、失われてはいない。見つけ出してくださるお方がいる。どんな防水加工が施された心にも、入り込んでいく。神さまの愛はその孤独に打ち勝つのです。その愛が他でもないイエスさまです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3：16）この孤独の中へ、愛する独り子をお遣わしになられる。神さまの愛がわたしたちの頑々な心に、孤独の中に突入してくるのです。

「与える」（ディドーミ）という言葉は、新約聖書では「引き渡す」（パラディドーミ）という言葉と関係があります。この「引き渡す」は、イエスさまが十字架に引き渡されるところで使われます。神さまの愛を受け入れない、この頑なさがすでに裁きになっているわけですが、その裁きをイエスさまはあの十字架において、自ら負ってくださいました。どんなに拒否しても、そのようにして神さまの愛は、わたしたちの心の中に入ってくる。どんなに防水加工しても、そこにも染み込んでいきます。

それは死という、これ以上ない孤独の中にも入り込む愛です。誰もが死んだら一人だと思ってしまう。もちろん誰もそこに付き添ってあげることはいけません。けれども、そこにもイエスさまはおられる。そのために死に引き渡されたのです。「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」（詩編23：4）だから信仰において死は決して孤独ではありません。それゆえに信仰による葬りは慰めになります。

教会学校の礼拝で歌うこどもさんびかに、「神さまの愛は染みとおる。わたしたちの心に、日の光のように」（こどもさんびか40番）という歌があります。神さまの愛は染みとおる。本当にそうだなあと思います。どんなに拒否されても、そこにも染み込んでいく。それが神さまの愛です。「日の光のように」これは、日の光が当たるところがじんわりと温くなるように、そして温もりが土の中に浸透し伝わっていくように、神さまの愛はじんわりとわたしたちの中へ入ってくる。わたしたちもそういう愛に生きることができます。わたしたちは拒否されたら躊躇してしまうかもしれません。諦めてしまうかもしれません。「そっとしておこう」と思います。もちろん静かに見守ることも必要かもしれませんが、それだけでは愛は染み込んでいきません。だからこそ、関わりを持ちたいのです。何かできると思います。祈ることができるでしょう。手紙を届けること、電話することもできるでしょう。神さまはそのようにわたしたちを愛されたのです。その神さまの愛がわたしたちを押し出しています。

天の父よ。わたしたちの頑々な心をあなたの愛で溶かしてください。そのようにあなたから愛されているわたしたちが、またそのように誰かを愛することができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。